

名詞メタファーにおける関係名詞への転換の可能性:

「バイブル」を対象としたコーパス調査を通して*

すみで よしき
角出 凱紀

京都大学大学院

04241997sumide@gmail.com

概要: メタファー研究と文法研究の融合を図る先行研究において、メタフォリカルな解釈は概念的に依存的な要素と強く結びつくという傾向が指摘されてきた (e.g. Croft 1993, Sullivan 2013, 2016, Lederer 2019)。彼らに従えば、概念的に自律した要素とされる名詞はメタフォリカルな解釈を受けにくいということになりかねないが、実際の言語使用を見ると名詞メタファーは多々見受けられる。そこで、本研究はこの矛盾を解消する一つの説明としてメタフォリカルな解釈を受ける名詞は関係名詞へと転換することで自律性を下げているという仮説を立て、ケーススタディとして「バイブル」を対象としたコーパス調査を行い、その検証を行う。

キーワード: 名詞メタファー、「バイブル」、関係名詞と種別名詞、自律性と依存性

1 はじめに

Lakoff and Johnson (1980) 以来、認知言語学の分野においてメタファーは人間の認知機構としての側面に焦点が当てられることが多くなった。しかし、その一方で、メタファーと文法との関わり、いわば「比喩の文法」について考察されることはほとんどなかったと言って差し支えないだろう。そのような潮流の中で、メタファー研究と文法研究の融合を図った意欲的な研究の一つが Sullivan (2013, 2016) である。

しかし、彼女の議論の大半は動詞メタファーや形容詞メタファーに費やされており、名詞メタファーについて十分な議論を提供しているとは言えない節がある。特に、以下のような「種別名詞 (sortal noun)」を含むメタファー表現は研究の対象から除外されてしまっている。

(1) a. メタファー研究のバイブル

* 本稿は、メタファー研究会「メタファーとコーパス」(2024年3月18日、於・京都大学吉田南キャンパス)で筆者が発表した内容をもとにしている。

b. 恋愛映画の金字塔

そこで本研究では、このような種別名詞を用いたメタファー表現の使用実態を明らかにすることを目的とする。本稿の構成は次の通りである。まず2節で本研究が則る理論的前提を確認し、仮説を提示する。続く3節では、仮説検証のために種別名詞「バイブル」を対象としたコーパス調査を実施する。そして、4節では収集した事例の詳細な分析を通して、コーパス調査の結果を考察する。5節はまとめである。

2 理論的前提

本節では、議論の前提となる (i) 自律性と依存性の区別、(ii) 自律／依存性とメタファーの関係、(iii) 種別名詞と関係名詞の区別、について述べたうえで、本研究の仮説を提示する。

2.1 自律性と依存性の区別

認知文法 (e.g. Langacker 1987, 1991, 2008) における主要な概念の一つに「**自律性 (autonomy)**」と「**依存性 (dependence)**」の区別があり、以下のように定義されている。

(2) One structure, *D*, is dependent on the other, *A*, to the extent that *A* constitutes an elaboration of a salient substructure within *D*.

(Langacker 1987: 300)

ここで *near the door* という表現を例にとってみることにする。*near* がプロフィールしているのは、トラジェクター (trajector: tr) とランドマーク (landmark: lm) の位置関係であり、*the door* によってそのスキーマ的なランドマークが精緻化 (elaborate) されることによって、*near the door* という言語表現が実現している。このことから (2) の定義に従うと、*near* は *the door* に比べて依存的であると結論づけられる。さらに、*a table near the door* を考えてみると、ここでは *near the door* のスキーマ的なトラジェクターが *a table* によって精緻化されていることから、*near the door* は *a table* に比べて依存的であるということになる (図 1)。

2.2 自律／依存性とメタファーの関係

認知文法の観点からメタファー表現の分析を行った Sullivan (2013, 2016) は、次のような制約を提唱している (cf. Croft 1993, Lederer 2019)。

(3) Autonomy-Dependence Constraint

In a metaphoric phrase or clause that can be understood out of context, every source-domain item must be conceptually dependent relative to at least one autonomous target-domain item.

(Sullivan 2013: 135)

例として単純な英語の他動詞構文 [Subj V Obj] を考えてみる。この構文では、動詞 V がプロファイルする関係におけるトラジェクターとランドマークをそれぞれ主語 Subj と目的語 Obj が精緻化することによって実現されるため、V が依存的であり、Subj と Obj が自律的であると分析される (図 2)。したがって、(3) の指摘と照らし合わせると、何らかのメタファー解釈を要する [Subj V Obj] 構文では V が根源領域に属する要素であり、Subj または Obj が目標領域に属する要素であるということになる。実際、*The lawyer built an argument* といったメタファー表現を考えてみると、動

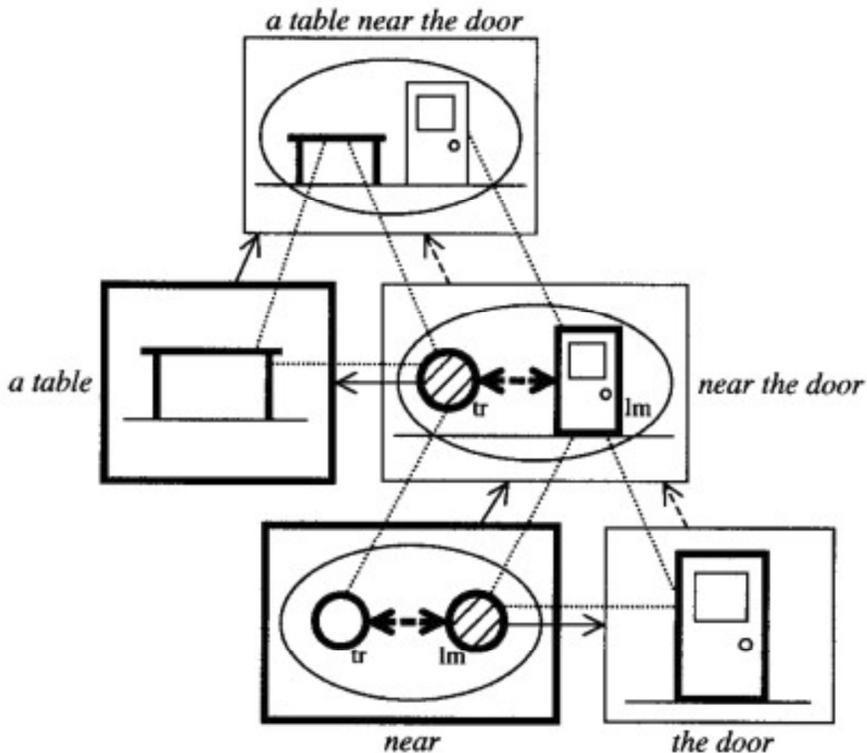


図 1: *a table near the door* の認知図式 (Langacker 2008: 203)

詞 *built* は <THEORIES ARE BUILDINGS> というメタファーの根源領域に、目的語 *an argument* は目標領域にそれぞれ属していることがわかる (Sullivan 2016: 145ff.)。

Conceptual relation:	autonomous	dependent	autonomous
Syntax:	Subj	V	Obj

図 2: 他動詞構文 (Sullivan 2013: 93)

2.3 種別名詞と関係名詞の区別

認知文法の枠組みでは、言語表現は「モノ (**thing**)」か「関係 (**relationship**)」のどちらかをプロファイルするとされるが、このうち名詞がプロファイルするのはモノである。そして、典型的な場合、モノは概念的に自律している一方で、関係は概念的に依存している (Langacker 2008: 200)。この前提を素直に受け取れば、概念的に自律しているモノをプロファイルする名詞は根源領域の要素になれないという結論が導かれることになる。つまり、名詞のメタフォリカルな解釈は原理上不可能であるということになってしまう。しかし、現実には名詞メタファーは確かに存在する。

ここで、本研究では多くの先行研究 (e.g. De Bruin and Scha 1988, Löbner 1985, 2011, Barker 2019, 西山 2003) に従って、名詞を次のような 2 つのクラスに分類する。

(4) 種別名詞 (**sortal noun**):

他の対象との関係に拠らずしてモノをプロファイルする名詞

(5) 関係名詞 (**relational noun**):

他の対象との関係において初めてモノをプロファイルする名詞

端的に言えば、両者の違いは「項 (**argument**)」を必要とするか否かという点に集約される。例えば、「作家」は<詩や文章を書くことを職業とする人>という意味であり、この属性を満たせばその人物は「作家」である。その一方で、「作者」は単に<ある作品を製作した人>という意味であり、「○○の作者」というように何を製作したのか明らかにしない限り、ある人物が「作者」であるかどうか判断できない。この際の「何を」にあたるものが項である。

親族名称や身体部位詞に代表される関係名詞は項によって精緻化される必要があるという点において、その項と比べて依存的であると想定できる。したがって、Croft (1993: 359) は、例えば *the mouth of the river* では、*mouth* が結果的には *river* より

も依存的であり、その反対に *river* が *mouth* よりも自律的である、としている (cf. Sullivan 2013: 117-119)。これにより、*mouth* のメタフォリカルな解釈が (3) の制約を違反しない形で説明される。実際、Jamrozik et al. (2013) は関係名詞が他の名詞よりもメタファーになりやすいことを示す心理実験の結果を報告している。

しかし、本研究の主眼はむしろ種別名詞の場合はどうなるのかという点である。関係名詞とは異なり、項を必要としない種別名詞の場合、概念的に依存しているという先程の議論は適応が難しい。そこで、本研究では一つの可能性として次のような仮説を立てる。

(6) 本研究の仮説:

本来のリテラルな解釈では種別名詞である名詞がメタフォリカルな解釈を受けるときには関係名詞への転換が起こる

ここで重要なのは、この仮説はすべての種別名詞がこのストラテジーによってメタフォリカルな解釈を受けるということを主張するものでないという点である。別のストラテジーとして複数のレベルにまたがる自律／依存の関係によって種別名詞のメタフォリカルな解釈が可能になることもある¹。

3 コーパス調査

本節では、上述の仮説を検証するために名詞「バイブル」を対象としたケーススタディを行う。選定の理由としては、リテラルな解釈 (i.e. キリスト教・ユダヤ教における聖典・聖書) において項を必要としない種別名詞であること及びメタフォリカルな解釈で使用されている用例が相当数見込まれることが挙げられる。

本研究では、「バイブル」において関係名詞への転換が起こっているか否か判断するために所有構文での生起頻度を用いる。上述の「作者」のケースもそうであったように、関係名詞の項はいわゆる「所有者 (possessor)」として明示されることがほとんどである²。英語の場合は属格 (e.g. *my, her, Mary's*) や *of* 句が、日本語の場合は格助詞「の」がこれにあたる。実際、Haspelmath (2008, 2014, 2017) は関係名詞が種別名詞よりも所有構文で生起しやすいということをコーパス調査から報告している。この

¹ Sullivan (2013: 104ff.) によるコピュラ文の分析や角出 (2022) による「N1 の N2」の分析を参照されたい。

² 著作と作者の関係がそうであるように、本稿における「所有」とは決して狭義の所有関係を意図するものではない (cf. Taylor 1989)。

ことを踏まえると、ある名詞の関係名詞らしさは所有構文での生起頻度で間接的に測ることが可能であると考えられる (Glass 2022: 837)。そこで、本研究でも関係名詞らしさと所有構文での生起頻度に相関関係があるという前提のもと議論を進めることとする。

3.1 手法

次に具体的な調査の手法について述べる。まず、コーパス調査の結果をもとに以下のようなクロス表を作成する。調査に使用するのは、「中納言」及び『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(中納言バージョン 2.7.2・データバージョン 2021.03)である。

表 1: バイブル_M と バイブル_L の比較

	バイブル _M	バイブル _L
[N の X]	<i>a</i>	<i>c</i>
¬ [N の X]	<i>b</i>	<i>d</i>
合計	<i>a + b</i>	<i>c + d</i>

表中の *a* はある名詞「バイブル」がメタフォリカルに使用され、かつ、所有構文 [N の X] における X のスロットに生起する事例 (i.e. N のバイブル_M) の粗頻度である。その一方で、*b* は「バイブル」がメタフォリカルに使用されているものの、所有構文 [N の X] における X のスロットに生起しない事例の粗頻度である。同様に、*c* は「バイブル」がリテラルに使用され、かつ、所有構文 [N の X] における X のスロットに生起する事例 (i.e. N のバイブル_L) の粗頻度であり、*d* は W がリテラルに使用されているものの、所有構文 [N の X] における X のスロットに生起しない事例の粗頻度である。

次に、作成したクロス表をもとに統計ソフト R を用いてフィッシャーの正確確率検定 (Fisher's exact test) を行うことで、バイブル_M とバイブル_L とで所有構文との結びつきに差があるかどうか確かめる。この際の帰無仮説 H_0 及び対立仮説 H_1 はそれぞれ以下のように設定する。

H_0 : バイブル_M とバイブル_L は所有構文 [N の X] における X に同程度生起する。

H_1 : バイブル_M はバイブル_L よりも所有構文 [N の X] における X に生起しやすい。

得られた *p* 値が有意水準 $\alpha = 0.05$ を下回った場合、帰無仮説を棄却し、対立仮説を

採用することとする。

3.2 結果

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』において、「バイブル」を含む事例は全部で93件が見つかった。このうち、「バイブル」がメタフォリカルに使用されていると判断されるものは69件で、リテラルに使用されていると判断されるものは18件³であった。残る6件に関しては、人名と考えられるものや文脈が乏しく判断がつかないものであり、今回の調査対象から除外することとした。調査の対象となった87件を上述のクロス表に従って分類した結果が以下の表2である。

表 2: コーパス調査の結果: 「バイブル」

	バイブル <i>M</i>	バイブル <i>L</i>
[N の X]	40	5
¬ [N の X]	29	13
合計	69	18

得られた p 値は $p = 0.02111929$ であり、有意水準 $\alpha = 0.05$ を下回った。つまり、メタフォリカルに使用される「バイブル」はリテラルに使用される「バイブル」よりも所有構文で有意に生起しやすいということが確認された。つまり、少なくとも「バイブル」に限って言えば、確かに種別名詞から関係名詞へと転換していることが確認されたと言って差支えないだろう。

4 考察

前節では、「バイブル」の種別名詞から関係名詞への転換が確認された。そこで本節では、採集された事例の詳細な分析を行い、この結果について考察を進めていきたい。

³ 具体的には、以下のような事例をリテラルな使用と判断した。

- (i) …教会で賛美歌を歌い、牧師さんのお説教を聞き、バイブルを読む。
(LBi2_00077 3330)
- (ii) それは大統領がバイブルを開き、その前にひざまずいている姿でした。
(LBh3_00112 6990)

4.1 所有構文に生起する「バイブル」

第一に、関係名詞への転換の動機について、「バイブル」が要求する項、すなわち、先行する「Nの」の機能の観点から考察する。(7)はコーパス上で見つかったメタフォリカルな「Nのバイブル」の代表的な事例の一部である⁴。

- (7) a. フェミニズムのバイブル (LBmn_00019 45760)
 b. 女性解放運動のバイブル (LBmn_00019 43880)
 c. フェミニストのバイブル (LBq2_00049 810)

これらの事例では、「Nの」が後続する名詞をメタフォリカルに解釈するための目標領域を指定していると考えられる⁵。例えば、(7a)における「フェミニズムの」や(7b)の「女性解放運動の」、(7c)の「フェミニストの」はフェミニズムドメインを喚起し、「バイブル」をキリスト教・ユダヤ教ドメインではなく、フェミニズムドメインで解釈することを指定していると考えられる。これにより、「バイブル」は<キリスト教・ユダヤ教における聖典・聖書>という解釈ではなく、<フェミニズムにおいて権威ある文献>というメタフォリカルな解釈が可能となるのである(表3)。

表3: (7)の基盤となっている写像関係

キリスト教・ユダヤ教 (起点領域)		フェミニズム (目標領域)
信者	→	フェミニスト
信仰する	→	賛同する
教義	→	女性の解放
バイブル	→	権威ある文献

これと同様に「Nの」が何らかの社会運動・思想を目標領域として指定していると思われる事例は他に次のようなものがある。

- (8) a. 青年運動のバイブル (PB12_00253 19560)
 b. 人種差別反対のバイブル (LBi9_00165 82210)

⁴ 引用したすべての事例にはサンプルIDと開始位置を付記しておく。

⁵ Diegnan (2005: 161)も、一部の身体部位詞(e.g. *body, head, eyes, face*)のメタファーが常に目標領域の要素によって修飾されることをコーパス調査から報告している(cf. 橋本他 1994)。

- c. 反全体主義思想のバイブル (OY14_11822 11320)
 d. 反核運動のバイブル (PM31_00164 4010)

これらの事例において「Nの」は、青年運動、人種差別反対運動、反全体主義思想、反核運動といった目標領域を喚起することで、「バイブル」が各々の社会運動・思想における<権威ある文献>というメタフォリカルな解釈を受けることに寄与している⁶。また、「Nの」が特定の目標領域を指定しているとは考えにくい事例も存在する。

- (9) a. 賢い消費者のバイブル (LBn3_00066 20)
 b. ファッションナブルなヤングのバイブル (LBd5_00017 56050)
 c. 多くの経営者のバイブル (PB45_00150 52300)
 d. 乙女のバイブル (OY14_04481 1310)
 e. 非行に走る少女たちのバイブル (PB13_00395 27730)
 f. 受験生のバイブル (PM53_00033 2150)

先程の議論を当てはめれば、(9)では目標領域として消費ドメイン、経営ドメイン、若者ドメインといった多種多様なドメインが指定されているということになる。しかし、これらのドメインにキリスト教・ユダヤ教ドメインとの構造的類似性を認めるのはやや強引と言えるだろう。むしろ、これらのメタファー表現の基盤となっているのは、Lakoff and Turner (1989: 162) が指摘する <GENERIC IS SPECIFIC> であると考えられる⁷。ここでは、信者たちが人生の悩みを解決するためにバイブルを参照するという特定の構造が、同じ悩みを持つ集団⁸がその解決のためにある特定の文献を参考にするというより一般的な構造に写像されているのである。そして、「Nの」が悩める集団を指定し、この一般的な構造を間接的に喚起することで、「バイブル」は各々の集団 (e.g. 賢い消費者、ファッションナブルなヤング、等) が<参考にする文献>というメタフォリカルな解釈が可能になっていると考えられる (表 4)。

⁶ 「Nの」が指定するのはフェミニズム、青年運動、人種差別反対運動、反全体主義思想、反核運動といった個別具体的なドメインではなく、抽象的な社会運動・思想ドメインであるとも想定できるが、本稿ではその検証には立ち入らないことにする。

⁷ Sullivan and Sweetser (2010) 及び鍋島 (2011) はこれを純然たるメタファーと見なすことに懐疑的な立場をとっているが、本稿では Lakoff and Turner (1989) に従いメタファーとして分析を進める。

⁸ あとの事例からも分かるように必ずしも「集団」であるとは限らないが、暫定的に「集団」と呼ぶことにしたい。

表 4: (9) の基盤となっている写像関係

SPECIFIC (起点領域)		GENERIC (目標領域)
信者	→	同じ悩みを持つ集団
信仰する	→	従う
教義	→	悩みを解決するための指針
バイブル	→	参考にする文献

このように後続する名詞を解釈するための目標領域を指定するという機能は「ドメイン形容詞 (*domain adjective*)」と呼ばれるタイプの形容詞にも認められる (e.g. Sweetser 1999, Sullivan 2013, Reijnierse et al. 2018, Zwarts 2019)。例えば、*mental exercise* というメタファー表現では、先行する形容詞 *mental* が後続する名詞 *exercise* を身体ドメイン (BODY domain) ではなく、精神ドメイン (MIND domain) で解釈することを指定している⁹。Goatly (2011: 182) は、このような修飾要素を、目標領域を指定しつつ後続する名詞がメタファーであることを示すある種の比喩指標と見なしている。

なお、「N の」が比喩指標として機能していないと考えられる事例も存在する。(10) における「唯一の」や「唯一無二の」は、社会運動・思想や悩める集団を喚起しているとは思えない。ここでの「N の」は、メタフォリカルな解釈とは無関係に後続する名詞を修飾している「第三形容詞」(e.g. 村木 2003) として捉えるべきものである。

- (10) a. …塙の中に閉じこめられたジョーにとって“あした”へと続く唯一のバイブルであり… (PB17_00204 5010)
- b. プロを目指し始める以前の私にとって、唯一無二のバイブルがこの『モダン・ゴルフ』だったわけです。 (PM11_00472 6410)

その代わりに、「塙の中に閉じこめられたジョーにとって」や「プロを目指し始める以前の私にとって」が悩める集団を目標領域として指定する比喩指標の機能を担ってい

⁹ 非ドメイン形容詞はそれが修飾する名詞と比べて依存的であるのに対して、ドメイン形容詞はその逆であるとされる (Dancygier and Sweetser 2014: 135)。実際、非ドメイン形容詞である *large* は *large molecule* と *large planet* で意味がそれなりに変動するが、ドメイン形容詞である *academic* は *academic job* と *academic intuition* で全くと言ってよいほど意味が変動しない。

る。これは、格助詞「の」が連続してしまうことを避けるという文体的な理由から、「Nの」ではなく「Nにとって」が比喩指標として選択された結果によるところが大きいと推察される。

以上の観察から、「バイブル」は目標領域を指定する比喩指標を、基本的には「Nの」として要求すると言えよう。この性質により、メタフォリカルな「バイブル」はリテラルな「バイブル」よりも有意に所有構文で生起しやすいという結果が得られたと結論づけたい。

4.2 所有構文に生起しない「バイブル」

メタフォリカルな「Nのバイブル」における「Nの」が一種の比喩指標であるならば、所有構文に生起しない「バイブル」は何か別の比喩指標を伴うことが容易に予想される。実際、所有構文に生起しない29件のうち、その大半は「Nの」以外の比喩指標を伴う事例である。以下、三種類の代表的なものに絞って考察を進める。

第一に、前述の「Nにとって」が挙げられる。

(11) a. お野菜大嫌いな私にとって、バイブルになりそうだよ

(OY03_06847 2210)

b. 自閉症を扱う医師にとって、バイブルと言うべき本である

(PB54_00269 45890)

繰り返しになるが、ここでは「Nにとって」が「Nの」と同様に目標領域を指定する機能を果たしている。このように「Nにとって」が「Nの」の代用として使用されることは、なにもメタフォリカルな「バイブル」に限った話ではない。以下のような、親族関係を語る際にも「Nの」と「Nにとって」は概ねパラフレーズが可能である。

(12) a. あの人は、私の叔父にあたります。

b. あの人は、私にとって叔父にあたります。

つまり、「Nの」と「Nにとって」はそもそもリテラルな文脈において共通する機能(i.e. 項の明示)を有していると言え、それ故にメタフォリカルな文脈においても目標領域の指定という共通する機能を果たすと推察される。そして、「Nの」と「Nにとって」が関係名詞の要求する項の明示という機能を共有する以上、「Nにとって」の使用は「バイブル」の関係名詞への転換を支持するものであると言えよう。

第二に、接尾辞「-的」の付加が挙げられる。

(13) a. …愛読をしていた哲学書の他に、バイブル的な「ライ麦畑でつかまえて」

と云う、サリンジャーの小説があった。

(OY13_06363 16670)

b. …まさにコーランと並ぶバイブル的な存在なのだという。

(LBs2_00061 25510)

接尾辞「-的」は、「Nの」や「Nにとって」とは異なり、目標領域を指定する機能を担っていない。ここでの「-的」の主な機能は、「バイブル」の統語範疇を名詞からナ形容詞 (i.e. 形容動詞) へと変化させるところにある (cf. 山下 2013)。認知文法において形容詞が典型的にプロファイルするのは「**非時間的關係 (nonprocessual relationship)**」であり (e.g. Langacker 2008: 115-116)、この点において「バイブル的(な)」は、関係名詞への転換と同様に、自律性の低下・依存性の増加が起こっていると言えるだろう。

第三に、複合名詞 [N + バイブル] という形式をとるものも一定数見つかった。

(14) a. プロ投資家の常識を完全公開した「源太式投資バイブル」付き

(OY14.27558 2180)

b. 「ZARA」の着こなしバイブル

(PM41_00223 270)

Croft (1993: 360) は、*clothes tree* や *acorn cup* という複合名詞では、*clothes / acorn* が *tree / cup* の顕著な下部構造 (salient substructure) を精緻化しており、*tree / cup* が依存的な要素であるという分析を展開している。これと類比的に捉えると、複合名詞 [N + バイブル] も「バイブル」の依存性を高める一つの方策であると考えられる。

このように、少なくともここで取り上げた三種類の比喩指標はどれも「バイブル」の種別名詞から関係名詞への転換、すなわち、自律性の低下・依存性の増加と関係が深いものであり、決して本研究の仮説と矛盾するものではないのである。

5 おわりに

本研究では、種別名詞がメタフォリカルな解釈を受ける際に関係名詞への転換が起こるといふ仮説を立て、名詞「バイブル」を対象としたコーパス調査によってその検証を試みた。調査の結果、メタフォリカルな「バイブル」はリテラルなそれよりも有意に所有構文で生じやすいことが確認され、目標領域を指定する要素を項として要求する関係名詞へと転換している可能性が示された。また、所有構文に生じしない「バイブル」の事例に関しても、所有構文とは別の方策で自律性の低下・依存性の増加が実現されていることが確認された。

最後に、今後の課題として異なる名詞での調査の必要性が挙げられる。本稿の目的は、すべての名詞メタファーに関して種別名詞から関係名詞への転換が起こることを主張するものではないため、「バイブル」に焦点を当てて調査・考察をおこなった。とはいえ、本研究をより意義あるものへと昇華させるためには、「バイブル」以外の名詞を対象とした調査が必要不可欠であることは筆者も認めるところである。

参考文献

- Barker, Chris. 2019. Possessives and relational nouns. In Paul Portner, Klaus von Heusinger, and Claudia Maienborn (eds.), *Semantics: Noun Phrases and Verb Phrases*. 177–203. Berlin/Boston: De Gruyter Mouton.
- Croft, William. 1993. The role of domains in the interpretation of metaphors and metonymies. *Cognitive Linguistics* 4(4): 335–370.
- Dancygier, Barbara and Eve Sweetser. 2014. *Figurative Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- De Bruin, Jos and Remko J. H. Scha. 1988. The interpretation of relational nouns. In *Proceedings of the 26th annual meeting on Association for Computational Linguistics*. 25–32. Association for Computational Linguistics.
- Diegnan, Alice. 2005. *Metaphor and Corpus linguistics*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Glass, Lelia. 2022. Quantifying relational nouns in corpora. *English Language and Linguistics* 26(4): 833–859.
- Goatly, Andrew. 2011. *The Language of Metaphors*. 2nd edition. London: Routledge.
- 橋本三奈子・桑畑和佳子・青山文啓・村田賢一. 1994. 「名詞の比喩的表現とその統語的特徴」『情報処理学会第 49 回全国大会講演論文集』(人工知能及び認知科学) 139–140. 情報処理学会.
- Haspelmath, Martin. 2008. Frequency vs. iconicity in explaining grammatical asymmetries. *Cognitive Linguistics* 19(1): 1–33.
- Haspelmath, Martin. 2014. On system pressure competing with economic motivation. In Brian MacWhinney, Andrej Malchukov, and Edith Moravcsik (eds.), *Competing Motivations in Grammar and Usage*. 197–208. Oxford: Oxford University Press.
- Haspelmath, Martin. 2017. Explaining alienability contrasts in adpossession constructions: Predictability vs. iconicity. *Zeitschrift für Sprachwissenschaft* 36(2): 193–231.
- Jamrozik, Anja, Eyal Sagi, Micah Goldwater, and Dedre Gentner. 2013. Relational words

- have high metaphoric potential. In *Proceedings of the First Workshop on Metaphor in NLP*. 21–26. Association for Computational Linguistics.
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, George and Mark Turner. 1989. *More than Cool Reason: a Field Guide to Poetic Metaphor*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol.1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol.2: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: An Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Lederer, Jenny. 2019. Lexico-grammatical alignment in metaphor construal. *Cognitive Linguistics* 30(1): 165–203.
- Löbner, Sebastian. 1985. Dfinites. *Journal of Semantics* 4: 279–326.
- Löbner, Sebastian. 2011. Concept types and determination. *Journal of Semantics* 28: 279–333.
- 村木新次郎. 2003. 「第三形容詞とその意味分類」『同志社女子大学日本語日本文学』 15: 1–28.
- 鍋島弘治朗. 2011. 「Generic is Specific はメタファーか—慣用句の理解モデルによる検証—」『日本認知言語学会論文集』 2: 182–191.
- 西山佑司. 2003. 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』東京: ひつじ書房.
- Reijnierse, W. Gudrun, Christian Burgers, Tina Krennmayr, and Gerard J. Steen. 2018. On metaphorical views, dynamite, and doodlings. *Review of Cognitive Linguistics* 16(2): 431–454.
- Sullivan, Karen. 2013. *Frames and Constructions in Metaphoric Language*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Sullivan, Karen. 2016. Integrating constructional semantics and conceptual metaphor. *Constructions and Frames* 8(2): 141–165.
- Sullivan, Karen and Eve Sweetser. 2010. Is "Generic is Specific" a Metaphor. In Fey Parrill, Vera Tobin, and Mark Turner (eds.), *Meaning, Form, and Body*. 309–328. Stanford: CSLI Publications.
- 角出凱紀. 2022. 「メタファー明示構文『N1 の N2』に関する考察—『鏡の海』と『ネッ

トの海』を例に一」『言語科学論集』 28: 49–69.

Sweetser, Eve. 1999. Compositionality and blending: Semantic composition in a cognitively realistic framework. In Theo Janssen and Gisela Redeker (eds.), *Cognitive Linguistics: Foundations, Scope and Methodology*. 129–162. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

Taylor, John R. 1989. Possessive genitive in English. *Linguistics* 27: 663–686.

山下喜代. 2013. 「接辞性字音形態素の造語機能」野村雅昭（編）『現代日本漢語の探究』 83–108. 東京: 東京堂出版.

Zwarts, Joost. 2019. On domain adjectives and the metaphors they modify. In *Proceedings of the 22nd Amsterdam Colloquium*. 437–444. ILLC.

使用コーパス・使用ツール

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 ver.2021.03, 国立国語研究所,

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>

R: *A language and environment for statistical computing*. R Foundation for Statistical Computing, <https://www.R-project.org/>

On a possible conversion into relational nouns in nominal metaphors:

A corpus-based case study of *baiburu*

Yoshiki Sumide

Sullivan (2013: 135), who attempts to fuse the studies of metaphor and those of grammar, claims that “every source-domain item must be conceptually dependent relative to at least one autonomous target-domain item.” This constraint, however, is often hard to apply to the analysis of nominal metaphors because most nouns, which are defined as profiling things in Cognitive Grammar, are supposed to be intrinsically autonomous. To resolve the contradiction, this study hypothesizes that nouns, especially sortal ones, might undergo a conversion into relational ones to facilitate metaphorical interpretation by increasing their dependency, and conducts a corpus-based case study of *baiburu* (“Bible”).

As a result, it is discovered that *baiburu* more often appears in the possessive construction (i.e. *N-no-baiburu*) when metaphorically used than when literally used, which suggests that the sortal noun in question turns into a relational one. A close analysis of the data shows that the additional element which *baiburu* requires plays a role in identifying target domains in which it is metaphorically interpreted. It is also found that instances of *baiburu* which do not occur in possessive constructions increase their dependency by other means such as *N-ni-totte* (“for N”), *N-teki* (“N-ish”) and *N-baiburu* (N-N compounds).